



埼玉県のマスコット コハトン

Lib. Letter

2014 Autumn [9～11月]季刊

平成26年8月26日 通巻 第37号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

はにわー沈黙の語りべたち

期 間 : 平成26年8月26日(火)～11月27日(木)

場 所 : 埼玉県立熊谷図書館2階ロビー

日本人が過去から受け継いだ様々な遺産の中で、大人のみならず子供にも親しまれ、愛されているものの一つに「はにわ」があります。「人物はにわ」や「動物はにわ」の素朴な表情は人々を魅了し、その姿、形からは「はにわルック(スタイル)」という言葉が生まれるほど、現代にも根づいています

「はにわ」が歴史に登場したのは4世紀頃から7世紀始め頃といわれていますが、一体どんな理由で造られていたのでしょうか。その姿、形や表情は、何を表しているのでしょうか。

今回の資料展示では、古墳を豪華に飾り立てたり、その当時の人々の生活や儀礼、風習などを象徴したりする「はにわ」にスポットを当てます。

※展示資料とリストについて

(1) このリストに掲載されている県立図書館資料は、展示期間中、貸出ができません。貸出は展示終了後から行います。予約、複写は可能ですので、カウンターの職員にお尋ねください。なお、雑誌のバックナンバーは貸出できないものがあります。

(2) さきたま史跡の博物館の資料は貸出、複写ともにできません。

(3) リストの表記方法は以下のとおりです。

図書：『書名』（著者名 出版者 出版年）[請求記号]

雑誌：「誌名 巻号」（出版者）

今回の展示は、7つのコーナーにより構成されています。

1 イン트로ダクションー「日本書紀」にみる「はにわ」の起源

このコーナーでは、文献上に「はにわ」が初めて登場する『日本書紀』に関する資料を御紹介しています。

「はにわ」は、いつ頃から歴史の舞台に登場したのでしょうか。

古代の人々が書き残した記録の中では、8世紀初頭の頃に編さんされたといわれる『日

本書紀』に、「はにわ」に関する記述が見られません。

『日本書紀』巻6「活目入彦五十狭茅（いくめいりひこいさち）天皇 垂仁（すいにん）天皇」32年条は、当時の皇后が崩御した時の記事です。

秋7月6日、皇后・ヒハスヒメ命（日葉酢根〔ひはすね〕命）が崩御します。以前は、故人の寵臣たちは陵墓の境界に生き埋めにされ殉死する習わしがありましたが、垂仁天皇はこれを残酷なことと思ひ、禁じていました。

この時、土師氏（大和朝廷で葬式・陵墓・土器製作などを担当した氏）であった野見宿禰（のみすくね）が、生き埋めの代わりに土製の人や馬を立ててはどうか、と天皇に提案したのが「はにわ」の起源となった、というものです。

しかし、考古学的調査の結果から、現在では、この『日本書紀』の記述を起源とする説は歴史的事実の裏付けに乏しく、「はにわ」を製作していた氏族の功績を讃えるための創作とされています。

（ノミ宿禰は）自身で土部らをさしずして、埴（はにつち）を取り人、馬、そしていろいろの物の形をつくって、天皇に献〔上〕して、「今からのち、この土物（はに）をもって生きた人〔間〕にかえ、陵墓に樹〔立〕し、後世の法則としましよう」といった。（略）この土物をよんで埴輪（はにわ）といった。また立物（たてもの）とも名づけた。

（『日本書紀 上』山田宗睦訳 教育社 1992 p183）

—このコーナーの展示資料—

（図書資料）

- 『展示の解説 5-22』（埼玉県立歴史資料館 1980：浦和図書館蔵）[S069/テソ]
- 『天理図書館善本叢書と書之部 第54巻 日本書紀 1』（天理大学出版部 1983）[081/テ]
- 『巨大古墳を造る』（大塚初重編 作品社 2003）[210.32/キ]
- 『古代研究』（三浦佑之著 青土社 2012）[210.3/コ]
- 『日本史の研究』（木村武夫編 ミネルヴァ書房 1970）[210.04/ニ]

（雑誌資料）

- 「宝島 別冊 2140号 図解古墳に秘められた古代史の謎」（宝島社 2014）
- 「歴史読本 2007年11月号」（新人物往来社）

2 「はにわ」の種類とその意味—黙して語る

このコーナーでは、「はにわ」の種類とその意味に関する資料を御紹介しています。

『日本書紀』の記述にあるように、「はにわ」は墓（古墳）と密接に関係しています。

「古墳時代」と呼ばれる3世紀中頃から6世紀末頃まで、前方後円墳を代表とするいろいろな形の古墳が日本各地で造られました。この古墳に並べられたのが「はにわ」です。

「はにわ」は、大きく「円筒はにわ」と「形象はにわ」の二つに分けられています。

3世紀後半に造られ、日本に残る古墳の初期を代表するとされる箸墓古墳（奈良県）では、前方後円墳の頂上部から「壺型土器（はにわ）」とそれを上に乗せるための「器台形土器（はにわ）」が配置されていました。これらの「はにわ」は、弥生時代後期に作られていた土器を起源とするものとされています。この「壺形」と「器台形」が組み合わ

さった丸い筒状の「はにわ」が「円筒はにわ」と呼ばれるものです。

一方、もう一つの「形象はにわ」は種類が豊富で、我々に馴染みの深い「人物はにわ」や「動物はにわ」のほか、住居や倉庫などの建物を表した「家形はにわ」、盾や甲冑、鞆（ゆき：矢を入れて背負う道具）、鞆（とも：弓を射るときに腕を守る）などを表した「器財はにわ」などがあります。いずれも、何かの形を模倣したものです。

「形象はにわ」の中で最初に現れたのは、鳥の「はにわ」や、武具などの「器財はにわ」のようです。5世紀中頃になると、それまでのものに加え、「人物はにわ」や馬などの「動物はにわ」といった新たな種類も登場するようになります。

さて、これらの「はにわ」には、どのような意味や役割があったのでしょうか。また、何を表しているのでしょうか。

「円筒はにわ」は古墳を取り巻くように何重にも並べられていたもので、聖域として外界から区別して護ったり、古墳を荘厳に見せる役目や土留めなどの意味があったといわれています。

「形象はにわ」は、まず、その姿・形が記録や絵画に乏しい時代の物や風俗を直接的に伝えてくれます。例えば、「家形はにわ」ではその当時の建築様式や構造が分かります。

「器財はにわ」では当時使われていた武具が、「人物はにわ」では装束などが分かります。

また、「はにわ」が古墳上に並べられた「配置」も重要な意味があるとされ、様々な研究がされています。

4世紀中頃から5世紀になると、最初は「円筒はにわ」だけであったのが、被葬者の埋葬施設がある主体部（墳頂部）に「家形はにわ」と、それを取り巻くように盾や鞆などの「器財はにわ」が並べられるようになります。これは「家形はにわ」が祭祀を象徴する特別な施設を表し、「器財はにわ」には外敵から神聖な場所を護ったり、祭祀の場を厳粛にする役割があったと考えられています。その祭祀の内容や意義・意味には諸説ありますが、いずれにしても、古代の人々の心性が感じられます。

5世紀中頃以降には、「人物はにわ」や「動物はにわ」が登場して普及します。そして6世紀になると、当時の大和朝廷の本拠地である畿内（現在の近畿地方中央部あたり）と東国（現在の関東甲信地方あたり）では、だいぶ様相が異なってきます。畿内では徐々に「はにわ」が廃れていくのに対し、東国では爆発的に多くなります。（詳しくは「3 東国の「はにわ」－「はにわ」の隆盛」で御紹介します。）

この頃には、「はにわ」の並べかたが一群のものとして、特定の場面を表現するようになります。また、並べられる「はにわ」の種類や形態の違いが古墳の被葬者の身分や力の差を表すようになります。この場面についての解釈も、地域による違いもあるようですが、「被葬者に対する近習」「葬列」「殯（もがり）」「首長権の継承儀礼」などの諸説が提唱されています。

「当たり前のことだが、埴輪は古墳に並べられて初めて意味を持つ造形物」
（『歴史発掘 9』講談社 1996 p2）

参考：『図説はにわの本』（群馬県立歴史博物館友の会 1996）

『歴史発掘 9』（講談社 1996）

『東国古墳時代埴輪生産組織の研究』（日高慎著 雄山閣 2013）

「宝島 別冊 2014年 2140号 図解古墳に秘められた古代史の謎」（宝島社）

—このコーナーの展示資料—

(1) 円筒はにわ

(図書資料)

- 『日本考古学研究序説』(近藤義郎著 岩波書店 1985) [210.02/コ]
『考古資料の修復・複製・保存処理』(宮内庁書陵部陵墓課編 学生社 2009)
[210.025/コウ]
『古墳のための年代学』(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1999) [210.2/
コフ]
『ヤマトの王墓・桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳』(千賀久著 新泉社 2008)
[210.32/ヤマ]
『古代丹後の世界 1』(加悦町古墳公園はにわ資料館 1994) [216.2/コウ]
『巨大埴輪とイワレの王墓』(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2005)
[216.5/キヨ]
『埴輪のはじまり』(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2011) [216.5/ハニ]
『王墓を彩る』(岡山県立博物館 2002) [217.5/オウ]
『東アジアと日本の考古学 2』(後藤直編 同成社 2002) [220/ヒカ]

(2) 形象はにわ

(ア) 家形・器財はにわ

(図書資料)

- 『はにわ読本』(末永雅雄著 雄山閣出版 1987) [210.02/ハ]
『歴史発掘 9』(講談社 1996) [210.2/レキ]
『日本書紀研究 第15冊』(横田健一〔著〕 塙書房 1987) [210.3/ニ]
『はにわ』(国立歴史民俗博物館編 朝日新聞社 2003) [210.32/ハニ]
『埴輪及装身具』(高橋健自著 雄山閣 [1929]) [210.32/ハニ]
『器財はにわの世界』(栃木県教育委員会 1998) [213.2/キヤ]

(イ) 人物はにわ

(図書資料)

- 『関東の考古学』(後藤和民〔ほか〕著 学生社 1991) [210.02/カ]
『人物埴輪を語る』(金井塚良一著 さきたま出版会 1991) [210.2/ジ]
『古代日本人の信仰と祭祀』(松前健ほか著 大和書房 1997) [210.3/コ]
『古代史の論点 5』(金関恕〔ほか〕編 小学館 1999) [210.3/コウ]
『人物埴輪の文化史的研究』(塚田良道著 雄山閣 2007) [210.32/シン]
『人物はにわの世界』(稲村繁著 同成社 2002) [210.32/シン]
『古代近畿と物流の考古学』(石野博信編 学生社 2003) [216/コウ]

(雑誌資料)

- 「さいたまの教育と文化 2013年 69秋号」(さいたま教育文化研究所
2013: 浦和図書館蔵)

(ウ) 動物はにわ

(図書資料)

- 『はにわの動物園』(千賀久著 保育社 1994) [B210.02/チ]

- 『はにわの動物園 2』(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1991) [210. 2/
ハニ]
- 『「はにわ…古代あづまびとの風景…」図録』(鹿児島県歴史資料センター黎明館
1993) [210. 02/Ka19]
- 『はにわの動物園』(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1990)
[210. 02/Ka75]
- 『山内清男考古資料 14』(奈良文化財研究所 2004) [210. 0254/ヤマ]
- 『はにわうま』(馬事文化財団 2005) [210. 32/ハニ]

(3) その意味

(図書資料)

- 『古墳時代の鏡・埴輪・武器』(樋口隆康 [ほか] 著 学生社 1994) [210. 02/コ]
- 『埴輪の古代史』(増田精一著 新潮社 1976) [210. 02/ハ]
- 『橿原考古学研究所論集 第8』(橿原考古学研究所編 吉川弘文館 1988)
[210. 025/カ]
- 『論集日本文化の起源 1』(平凡社 1971) [210. 04/ロ]
- 『はにわの成立と展開』(加悦町教育委員会 1994) [210. 2/ハニ]
- 『東アジア世界における日本古代史講座 第4巻』(井上光貞 [ほか] 編 学生
社 1980)
- 『大王陵発掘! 巨大はにわと継体天皇の謎』(NHK大阪「今城塚古墳」プロジ
ェクト著 日本放送出版協会 2004) [210. 32/タイ]
- 『はにわ人は語る』(国立歴史民俗博物館編 山川出版社 1999) [210. 32/ハニ]
- 『よみがえる大王墓今城塚古墳』(森田克行著 新泉社 2011) [210. 32/ヨミ]
- 『大和の考古学 第3巻』(奈良県立橿原考古学研究所監修 近畿日本鉄道
2006) [D216. 5/ヤマ]

～連携企画～

さきたま 埼玉古墳群の「はにわ」

埴輪の世界

水口由紀子 (埼玉県立さきたま史跡の博物館)

古墳の出土品のなかで、私たちが最も魅了するものは「埴輪」ではないでしょうか？
畿内の古墳には概ね3世紀後半から円筒埴輪が立てられるようになりました。4世紀
中頃になると家や短甲(たんこう)・盾(たて)などの武具・武器をかたどった埴輪が加
わります。そして、人物や動物をかたどった埴輪は5世紀中頃に遅れて登場します。

関東地方では、人物埴輪は5世紀後半から7世紀初頭にかけて、盛んに古墳に立てら
れました。

埼玉県を代表する埼玉古墳群からも多くの埴輪が出土しています。

埼玉古墳群のなかで最初に造られ、国宝の金錯銘鉄剣(きんさくめいてっけん)を出
土した稻荷山古墳(いなりやまこふん)からも多くの人物埴輪が出土しています。稻荷
山古墳は5世紀後半から5世紀末に築造されたと推定されており、ここから出土した埴
輪群は県内で多種・多様な人物埴輪が樹立され始めた時期の代表例です。

埼玉古墳群で多くの埴輪が出土した古墳がもう一つあります。それは瓦塚古墳です。
特に西側の中堤(ちゅうてい)に多くの埴輪が立てられていました。瓦塚古墳は稻荷山

古墳よりも新しく6世紀前半から中頃、県内で最も盛んに埴輪が立てられた時期にあたります。

人物埴輪は古墳時代の人々の容姿や表情を、現代の私たちに生き生きと伝える、貴重な文化財です。



←瓦塚古墳出土琴を弾く男性埴輪



↑稲荷山古墳出土^{かぶと}をかぶった武人埴輪（頭部）

今回の資料展示は、以下の展覧会と連携して実施しています。

■企画展「ハニワの世界」

■主催・会場 埼玉県立さきたま史跡の博物館

行田市埼玉4834 TEL (048)559-1111

■会期 平成26年9月20日（土）～11月16日（日）

当館で展示する写真パネルのほか、企画展で出品される博物資料も併せてお楽しみください。

—このコーナーの展示資料—

【さきたま史跡の博物館 所蔵パネル】

「行田市埼玉古墳群・瓦塚古墳出土両手を差し出す女性埴輪（6世紀中頃／高さ約73cm）」

「行田市埼玉古墳群・瓦塚古墳出土琴を弾く男性埴輪（6世紀中頃／高さ約84cm）」

「行田市埼玉古墳群・瓦塚古墳出土盾持ち人埴輪（6世紀中頃／高さ約85cm）」

「行田市埼玉古墳群・稲荷山古墳出土眉庇付き冑を付けた男性埴輪（6世紀前半／高さ約30cm）」

「行田市埼玉古墳群・稲荷山古墳出土鈴鏡を下げた女性埴輪（6世紀前半／高さ約53cm）」

※いずれも、さきたま史跡の博物館 国宝展示室で展示されています。

3 東国の「はにわ」－「はにわ」の隆盛

このコーナーでは、他の地域とは異なり、独自の発展をみせた東国地域の「はにわ」に関する資料を御紹介しています。

6世紀後半頃になると、畿内をはじめ、東国以外の地域では前方後円墳の造営が徐々に減少したことが分かっています。これは、当時の大和朝廷による地方支配が一段と強化され、地域の豪族たちが直接的に支配されるようになったためではないか、といわれています。前方後円墳の造営は、その地域の支配を大和朝廷から認められていたことを意味していたので、前方後円墳の減少は、それまで以上に大和朝廷への服従度が強まったためではないか、というわけです。これに伴って、古墳に並べられていた「はにわ」の需要も著しく減少し、衰退していった、とみられています。

一方、東国では農業基盤の整備が進み、経済的に豊かであったようです。そのため、豪族たちの間で力関係の序列化が進まず、豪族たちは自らを顕彰するために、前方後円墳を競って造営したようです。これに併せて、「はにわ」も東国独自の発展をみるとともに、中小型の墳墓にも並べられるようになり、量的にも最盛期を迎えることとなります。

参考：『図説はにわの本』（群馬県立歴史博物館友の会 1996）

『歴史発掘 9』（講談社 1996）

－このコーナーの展示資料－

（図書資料）

『埼玉研究 第2巻』（埼玉県地域研究会編 国書刊行会 1982：浦和図書館蔵）
[S200.5/サ]

『歴史における芸術と社会』（日本史研究会編 みすず書房 1960） [210/N71]

『図説はにわの本』（群馬県立歴史博物館友の会 1996） [D210.02/ズ]

『東国の考古学』（群馬考古学研究会編 六一書房 2013） [210.025/ト]

『山内清男考古資料 13』（奈良文化財研究所 2002） [210.0254/ヤマ]

『関東の埴輪』（水戸市立博物館 1983） [210.2/カン]

『群馬・埼玉の埴輪』（金井塚良一〔ほか〕著 あさを社 1987） [210.2/ク]

『東国のはにわ』（福島県立博物館 1988） [210.2/ト]

『はにわの世界』（茨城県立歴史館 2013） [210.32/ハニ]

『東国大豪族の威勢・大室古墳群「群馬」』（前原豊著 新泉社 2009） [210.32/ト]

『埼玉の文化財 第53号』（埼玉県文化財保護協会 2013） [S709/サ]

『北武蔵の埴輪 酒巻古墳群を中心として』（行田市郷土博物館 2013：久喜図書館蔵） [S261/キ]

『埴輪の世界 第20回企画展』（朝霞市博物館 2007：久喜図書館蔵）[S202/
ハ]

（雑誌資料）

「調査研究報告 2002年 第15号」（埼玉県立さきたま資料館：浦和図書館蔵）

4 「はにわ」づくりー生産と現代における復原

このコーナーでは、「はにわ」の製作に携わる集団、そして現代の「はにわ」復原、製作に関する資料を御紹介しています。

一つの古墳が造営されると、そこに並べられる「はにわ」は膨大な数になります。一説では、日本最大の前方後円墳である仁徳天皇陵古墳には2万個、二番目に大きい応神天皇陵古墳（以上、ともに大阪府）には1万2,800個の「円筒はにわ」が並べられたといわれています。

このような大量の「はにわ」は、どのように造られていたのでしょうか。

大まかにみると、「はにわ」が登場し始めた初期の頃は、古墳に祀られるべき王（豪族）が死去すると、その都度、古墳の造営や「はにわ」の製作に必要な人が集められ、造られていたようです。

その後、5世紀に「人物はにわ」「動物はにわ」が出現し「はにわ」が普及すると、需要が高まります。また、焼成方法が従来の「野焼き」から「あな窯」に変わり、大量生産が可能になります。このような状況が、各地で「はにわ製作集団」を生み出したようです。

6世紀になると、これら製作集団が造った「はにわ」が、製作地から遠く離れた古墳に並べられる、という「広域供給システム」とでも呼べるような仕組みが出来上がります。これによって、「はにわ」の大量生産に伴う規格化と大量消費が生じ、「はにわ」が単なる古墳の装飾品となり、象徴的な意義をなくしていったようです。

参考：『埴輪』（大塚初重著 ニュー・サイエンス社 1985）

『図説はにわの本』（群馬県立歴史博物館友の会 1996）

『歴史発掘 9』（講談社 1996）

『東日本最大級の埴輪工房・生田塚埴輪窯』（高田大輔著 新泉社 2010）

—このコーナーの展示資料—

（図書資料）

『はにわ屋高田儀三郎聴聞帳』（金井塚良一著 新人物往来社 1994）[S200.2/
ハ]

『埴輪生産と地域社会』（城倉正祥著 学生社 2009：浦和図書館蔵）[S202/ハ]

『富沢窯跡』（古窯跡研究会 1974）[210.02/Ko97]

『メスリ山古墳大型円筒埴輪復元制作の記』（奈良芸術短期大学編 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2005）[210.2/メ]

『橿原考古学研究所論集 第15』（奈良県立橿原考古学研究所編 八木書店

- 2008) [210.025/カ]
- 『古墳時代研究の現状と課題 上』(宮内庁書陵部 2000) [210.32/コ]
- 『東国古墳時代埴輪生産組織の研究』(日高慎著 雄山閣 2013) [210.32/ト]
- 『埴輪づくりの実験考古学』(大学合同考古学シンポジウム実行委員会編 学生社 2006) [210.32/ハ]
- 『東日本最大級の埴輪工房・生出塚埴輪窯』(高田大輔著 新泉社 2010) [210.32/ヒ]
- 『房総と古代王権』(吉村武彦編 高志書院 2009) [213.5/ホ]
- 『児玉町八幡山埴輪焼場窯跡発掘報告書』(埼玉県立児玉高等学校 1961:浦和図書館蔵) [S259/コ]
- (雑誌資料)
- 「歴史読本 1976年9月号」(新人物往来社 1976)

5 エピローグー文筆家がみた「はにわ」

このコーナーでは、小説や評論など、文筆家が著した「はにわ」の話を御紹介しています。

遙か太古の時代に登場し、消滅した「はにわ」。その存在の記録は現代にまで伝わるとともに、歴史の枠を飛び出し、小説や評論など、身近なものにも登場します。そこには、「はにわ」そのものを取り上げたものもあれば、推理小説の舞台やストーリー設定の小道具、さらには「はにわ」のイメージを象徴的に用いた話など、歴史学や歴史研究とは少し違う「はにわ」の姿があります。

—このコーナーの展示資料—

(図書資料)

- 『和辻哲郎全集 第2巻』(和辻哲郎著 岩波書店 1989) [121.9/ウ]
- ※「人物埴輪の眼」所収
- 『埴輪ながらに』(町田みどり著 新星書房 1975:浦和図書館蔵) [SA911.1/マ]
- 『埴輪の馬』(小沼丹著 講談社 1986:久喜図書館蔵) [オ]
- 『時代小説秀作づくし』(黒岩重吾〔ほか〕著 PHP研究所 1994) [BM913]
- ※黒岩重吾著「埴輪刀」所収
- 『非行少女』(安芸由夫著 文芸広場社 1983:浦和図書館蔵) [SA913/ア]
- ※「ハニワの鳥」所収
- 『奇妙な夜』(田村泰次郎著 講談社 1961) [BM913]
- ※「埴輪の女」所収
- 『埴輪の家』(鳥井架南子著 実業之日本社 1993) [BM913]
- 『埴輪の柩』(島田一男著 桃源社 1979) [BM913]
- 『言の葉 1』(茨木のり子著 筑摩書房 2002:久喜図書館蔵) [918.68/イハ001]
- ※「ラジオドラマ 埴輪」所収
- 『月ヶ瀬』(伊豆文学フェスティバル実行委員会編 静岡新聞社 2005:久喜図書館蔵) [913.68/ツキ]
- ※川崎正敏著「埴輪の指跡」所収

『井伏鱒二全集 第12巻』(井伏鱒二著 筑摩書房 1975:久喜図書館蔵) [918.6/1]

『小林秀雄全集 9』(小林秀雄著 新潮社 1973:久喜図書館蔵) [918.6/3]

『山川方夫全集 第4巻』(山川方夫著 冬樹社 1976:久喜図書館蔵) [918.6/ヤ]

(雑誌資料)

「群像 2002年6月号」(講談社)

※古井由吉著「青い眼薬 1 埴輪の馬」所収

6 「はにわ」写真館—生きかえる「はにわ」たち

このコーナーでは、視覚的にも楽しい「はにわ」の写真を中心に御紹介しています。踊るはにわ、武人はにわ、楽器を持つはにわや馬や鳥、牛などの動物はにわ…。「はにわ」をよく眺めてみると、その姿や表情からは愛らしさや凛々しさなど、現代の我々の心にも伝わるものがあります。また、静かな佇まいの中に動的なイメージが浮かんでくるようなものもあります。

しばしの間、古墳に並ぶ「はにわ」のイメージを想像しつつ、お楽しみください。

—このコーナーの展示資料—

(図書資料)

『日本考古図録大成 第7輯』(日東書院 1930) [210/N88]

『考古資料大観 第4巻』(小学館 2004) [D210.025/ヨ]

『はにわ人と動物たち』(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2008) [216.5/ハ]

『古墳時代関係資料図録』(東北歴史博物館 2004) [210.32/ヨ]

『日本原始美術大系 3』(坪井清足責任編集 講談社 1977:久喜図書館蔵) [D708/N71]

『日本陶磁全集 3』(佐藤雅彦〔ほか〕編 中央公論社 1977:久喜図書館蔵) [D751.1/ニ]

『日本陶磁大系 第3巻』(平凡社 1990:久喜図書館蔵) [751.3/ニ]

『月夜のおおさわぎ』(九州国立博物館企画・原案 フレーベル館 2009) [E/ツキ]

上記以外にも、県立図書館では「はにわ」や日本古代史に関連する資料を所蔵しています。お探しの資料がございましたら、お気軽にお問い合わせください。



埼玉まなびいプロジェクト協賛事業
県民の日・彩の国教育の日協賛事業